

Title	ケネーの経済表とマルクスに就て：越村信三郎教授の『ケネー経済表研究』を中心として
Sub Title	Quesnay's tableau economique Marx : concerning mainly the work of Prof. S. Koshimura
Author	渡邊, 建
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.10 (1958. 10) ,p.896(56)- 915(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19581001-0056
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581001-0056">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581001-0056</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ケネーの経済表とマルクスに就て

—越村信三郎教授の『ケネー経済表研究』を中心として—

## 渡 邊 建

資本主義の自己批判期に把握された生産様式に於ける再生産の総括図表であったのである。

マルクスの社会的総資本の再生産及び流通循環の基本図解の研究からして越村信三郎教授はケネーの経済表に就ても度々論及せられていられたが昭和二十二年(一九四六年)に東洋経済新報の現代経済学叢書の第一巻として『ケネー経済表研究』を刊行せられた。

その緒言に、越村教授は「重農学派の始祖フランソワ・ケネーは十八世紀の中葉にフランス社会の農村と都市との資本の総再生産過程を経済表と名づけるところの一葉の解剖図に集約して経済学の建設史上に不朽の功績を残したのである。経済表の成立によって経済学は一個の科学となったときへいはれてゐる。」(同書「緒言」二頁)と述べられ、従って「経済学の歴史を取扱ふ書物でケネーの学説、特にその中心たる経済表に触れないものはほとんどないといつても過言ではない。……それにもかかはらず、すべての研究者のひとしく述べてゐるやうに、経済表には多くの解き難い謎が含まれてゐる

### 1

ローザ・ルクセンブルグ Rosa Luxemburg はその『資本蓄積論』Die Akkumulation des Kapitals, Ein Beitrag Zur Oekonomischen Erklärung des Imperialismus, Franke Verlag in Leipzig, 1921. の冒頭に「社会的総資本の再生産の問題を提起したことは、理論的国民経済学に関するマルクスの不朽の功績である。注意すべきことには、吾々は国民経済学の歴史において、この問題を正確に叙述しようとする試みをただ二つしか見ない——すなわち、その入口では重農学派の父ケネーにおいて、その出口ではカール・マルクスにおいて。」(長谷部文雄訳「青本文庫本」九頁)と述べているが「六つの出発点と帰着点とを結びつけた僅かに五本の線から成り立つ」ケネーの表式は仏蘭西革命直前の社会の生産様式に於ける再生産の総括的図表であり、「十四本の向上する点線と七本の下向する直線」で結び合された「マルクスの経済表」は

のである。」(同書「緒言」二頁)とせられ、経済表で難問となつて居り、いまだに未解決の問題となつて居るのは、

第一に、範式における資本の再生産の線の引き方の問題。  
第二に、原表においては、再生産過程の内部機構がどうなつてゐるかという問題。  
第三に、原表と範式とがいかなる連繫をもち、前者より後者へいかにして転化されたかという問題。  
第四に、学説史上の迷路となつて居るところの、ケネーの経済表とマルクスの再生産の表式との連繫——前者より後者に通ずる発展過程の糸——の模索の問題であるとせられる(同書「緒言」三頁)。

越村教授は「先づ再生産の問題にとつて、より包括的な、より完成された形式をもつところの範式を分析し、その基礎の上で原表の検討にうつること」(同書一〇頁)とせられたのである。

### 第一 生産階級の投資と投資の利子に就て

ケネーは経済表第二版の『説明』に又『経済表の分析』に生産階級の農業の創設の基金 *Fonds de l'établissement de la culture* を原投資として挙げて居るが、ミラボー侯が述べて居る如く「それは流通秩序の外に横はる」(Philosophie rurale, p. 26) ものとて、経済表の原表にも、範式にも記載されていないが、越村教授はその年々の消耗価値の補償として、その一割の利子が考察されて居る上は当然経済表に掲げらるべきものとしてその範式の分析表

ケネーの経済表とマルクスに就て

(同書七七頁、八二頁、八三頁、八六頁、本稿第一、第二、第三、第四図参照)にも、又ケネーが投資の利子を「支出の秩序を余りに複雑ならざらしめむが為に別に考察する」(Œuvres, p. iii: 邦訳、岩波文庫本二二頁、本稿第五、第六図参照)にも、固定不変資本の原投資十単位をその九単位 *9c* とその年々の磨滅分一単位 *1c* とに分けて特に記入して居られる。

ケネーは経済表の第二版の『説明』に「大規模耕作に於て犁一挺を備へる耕地百二十アルパンの農場の諸設備と第一回の収穫に先だつ二カ年間の耕作中に於ける家畜・道具・播種・飼料・維持費・賃銀等への支出の最初の基本としての可なり完備した原投資は一万リヴルと見積られる」(Œuvres, p. vi: 邦訳、岩波文庫本二四頁、坂田訳本三一頁)とし、ミラボー侯は『農業哲学』にこの原投資を「第一年度の収穫をあげる以前の耕作のために投せられた家畜・建物・器具・肥料・乾草・飼料・及び奴婢・日傭人夫・労働者への賃銀更に農業者とその家族の食料及び衣料に対する支出」(Philosophie Rurale, p. 29)と説明しているが、越村教授はフィジオクラートが斯く、原投資のうち固定資本の他に不純な要素を混入しているが、それがケネーの範式に多かれ少なかれ「不可解」の烙印を押したのであるとせられる(同書三三頁参照)。

ケネーは『経済表の分析』に、この農場創設の投資の利子として農産物の販売額の中から原投資額の一割の十億リヴルが年々回収

せらるることが一國繁栄の主要なる条件の一つであり、又農業者に對して懶惰な金利生活者に支払われると少なくとも同程度の利子をもたらずのが当然であると主張しているが (Chutes, p. 314: 邦訳、岩波文庫本五三頁、坂田訳本一四〇頁参照)、この原投資の年々の損耗の一単位、範式では十億リーヴルは工業の製作品によりて補填されると解釈するのがケネーの意図に反するものではないと越村教授も考えられるが (同書四三頁参照) 尚教授は、原投資のその複雑の内容からして、その補填に就て第二分析表以下に於て種々の考察がなされたのである。

又越村教授はケネーが生産階級の年投資二単位を農業者の生活に消費される農産物2vとなすも、それは「種子と労働とを含む」というオンケンのいわゆる「合理的な見解」に従い、それは農業の原料たる播種や補助材料たる肥料等を含むものと解して労働力十億リーヴル(流動可変資本一単位1v)と原料、補資材料十億リーヴル(固定不変資本一単位1zc)と仮定する(同書三八頁)。

第二 不生産階級の投資と投資の利子に就て

越村教授は先ず不生産階級に於ては年投資のみが存在し、原投資に就て少しも言及されていないことを指摘せられ、それは現実において決して存在することを妨げないし、また存在せざるをえないものであり、ケネーが不生産階級即ち都市の工業部門に固定資本たる原投資を掲げていないのは明らかに不当であり、誤謬であるとす

る。又不生産階級の原投資がこの階級の工業製作品から構成せられて居り、従つてその年間の平均磨減分が階級自体の製作品で補填され、従つて階級内の流通として経済表から除外されるとしても、前記の如く、生産階級に於て原投資の年々の補填が内部流通としても記述されている以上、不生産階級の側に於ては、それが省略されているのは理論的見地からしても、正当ではないとせられる(同書五六―七頁参照)。

不生産階級の原投資が階級自体の製作品で補填され、従つて階級内の流通として経済表から除外されるとしても、越村教授は年間の製作品の全額二単位を地主階級と、生産階級とに夫々一単位ずつ売却するを以て「工業家の手にはその消費のために自らの生産物の一微分子も余さない」(同書一一二頁)とし、従つて不生産階級のもものが、その階級内で作られた製作品を消費するといふミラボー侯の説明も、バウエルの解説も誤謬であると考えられ、工業の製作品がならその生産者自身の消費のために残らないことも経済表の前提の不備であるとせられる(同書六一頁、一〇六頁)。

次に越村教授は範式に掲げられた不生産階級の年投資は「十億リーヴルの価値ある原料のみからなる」ものとし、それは「生産期間の始めにおいて農業者から購入されたもの」で「価値形成の点から見れば不変資本0であり、回転様式から見れば流動資本であるからzcとする」(同書五七頁)。

而も越村教授はこの原料を製作する間に於て十億リーヴルの農産物が生活のために更に消費せられるものであるから「それは明かに

第三 越村教授の「範式分析表」に就て

(一)越村教授は経済表で難問の一つとなつて居るのは範式における資本の再生産の線の引き方の問題である(同書「緒言」三頁)とせられるが、範式におけるこの「不可解」の点に就て、教授の「範式分析第一表」では借地農業者が貨幣十億リーヴルをもって工業家より製作品を購入しそれによりて投資の磨減分を補填するものと表式する(同書七七頁、本稿第一図参照)。これはマルクスが、「反デューリング論」に、借地農業者が十億リーヴルの貨幣をもって購入す

可変資本であり、それは回転様式から見て流動資本であるから当然年投資に包括さるべきである。ケネーはこの存在を認めながら単に流動不変資本たる原料とし、不当にも年投資から、この可変資本を除外してしまつた」(同書五八頁)ものとして「ケネーは年投資に關して二つの相異なる見解を示してゐる。かれは農村の生産階級の年投資を可変資本(労働力)に限定した。かれはいまここに不生産階級のそれを流動不変資本(原料)に局限してゐる。これは明かに一つの論理的矛盾であり、かつ歴史的事実に背馳する」(同書五九頁)ものとせられる。

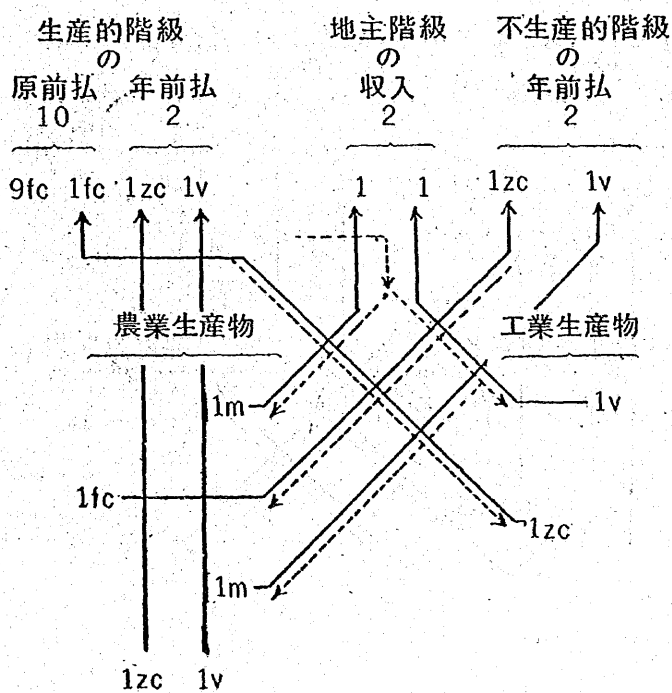
生産階級の年投資を流動資本とし、それを不変資本(農業の原料たる播種と補助資料たる肥料)と可変資本(労働力―生活のために消費する農産物)との合計と解した越村教授は同一の理由で「不生産階級の年投資のうち、これと同等の内容を盛りなければならぬ」(同書五九頁)として、不生産階級の投資として一単位のみを掲げる範式や原表の解説に於てもそれを二単位範式分析表では二十億リーヴル、原表の分析表では二十億リーヴルに修正し、それはいづれも流通不変資本(原料)1zcと流通可変資本(労働力)1vとから成るものと記入する(同書三九頁、六〇頁)。

二

越村教授はその『ケネー経済表の研究』に範式を四つの分析表によりて説明せられている。

ケネーの経済表とマルクスに就て

第一図 範式分析第一表

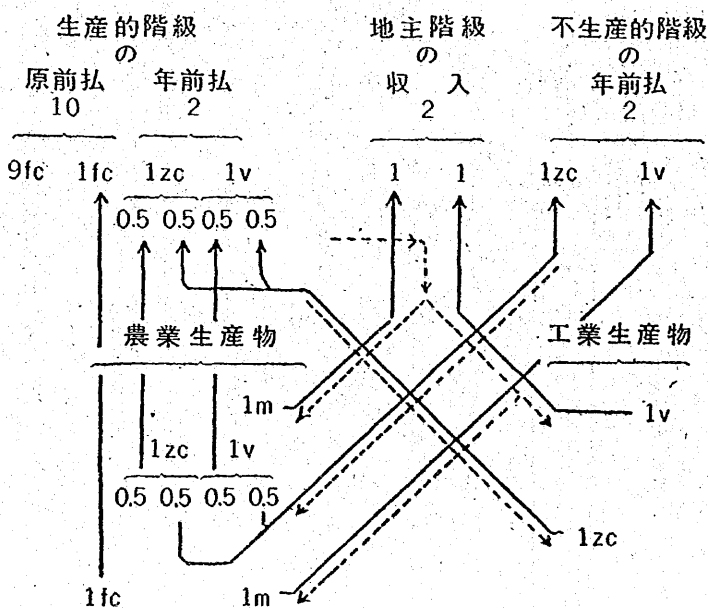


る工業製作品の大部分は農業用の道具、その他の耕作に必要な生産手段からなるもので、彼等の固定資本に対する利子の一転化形態に他ならぬものと解釈してゐるからである (F. Engels "Herrn Eugen Dühring Umwälzung der Wissenschaft." Stuttgart. 1921. S. 268)。

又この「分析第一表」にては投資の利子としての支出の回収分として再生産せられる農産物は不生産階級の工業製品の原料として購入せられるものと表式される。

(2) 次の「範式の分析第二表」では越村教授は生産階級よりの十億リーヴルの支出によりて不生産階級より購入せられた工業製品の一、五億リーヴルは農業用の原料や補助材料即ち流動不変資本zcとして使用され、その一、五億リーヴルは衣服、家具等として農家の消費手段即ち流動可変資本vとして、それはいずれも年投資として使用消費せられるものとする。これはマルクスが『剰余価値学説史』に不生産階級より購入せる工業製品をもって生産階級の年投資の半額が補償されると解するからである (『Theorien über den Mehrwert teil. I. S. 83』)。従って不生産階級に工業製品の原料として売却せられるは生産階級の年投資の回収として再生産せられる農産物であり、又生産階級の原投資の磨減分は農産物fc十億リーヴルにて補填されるものとする(同書八二頁、本稿第二図参照)。尚越村教授は原表の解釈ではこの「範式の分析第二表」と同一の考え

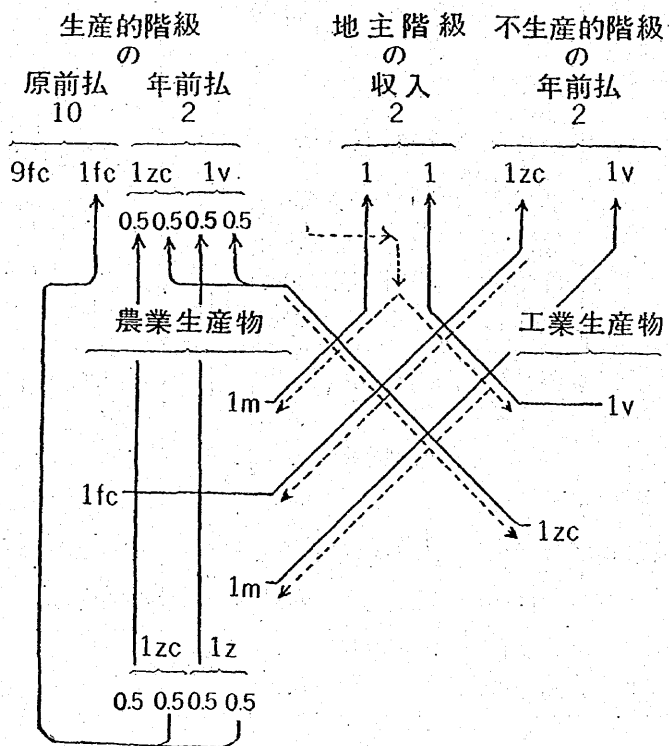
第二図 範式の分析第二表



方を採用していられる(「原表の分析表の略表」同書二二九頁、本稿第六図参照)。

(3) 更に又「範式の分析第三表」では「分析第二表」と同様に不生産階級より購入せられる工業製品の十億リーヴルは年投資としての流動不変資本zcとして五億リーヴル、その可変資本vとして五億リーヴル使用せられるものとするが、不生産階級に工業製品の原料と

第三図 範式の分析第三表

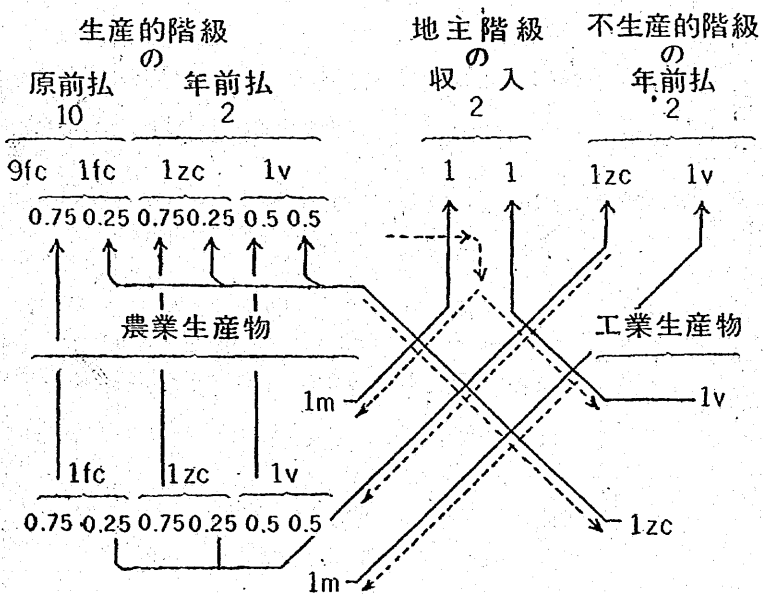


して売却せられる農産物は「分析第一表」と同様に原投資の利子としての支出の回収分として再生産せられるものとする。従って原投資の年々の磨減分は年投資の回収分として再生産せられる農産物にて補填せられるものとして表式する(同書八三頁、本稿第三図参照)。

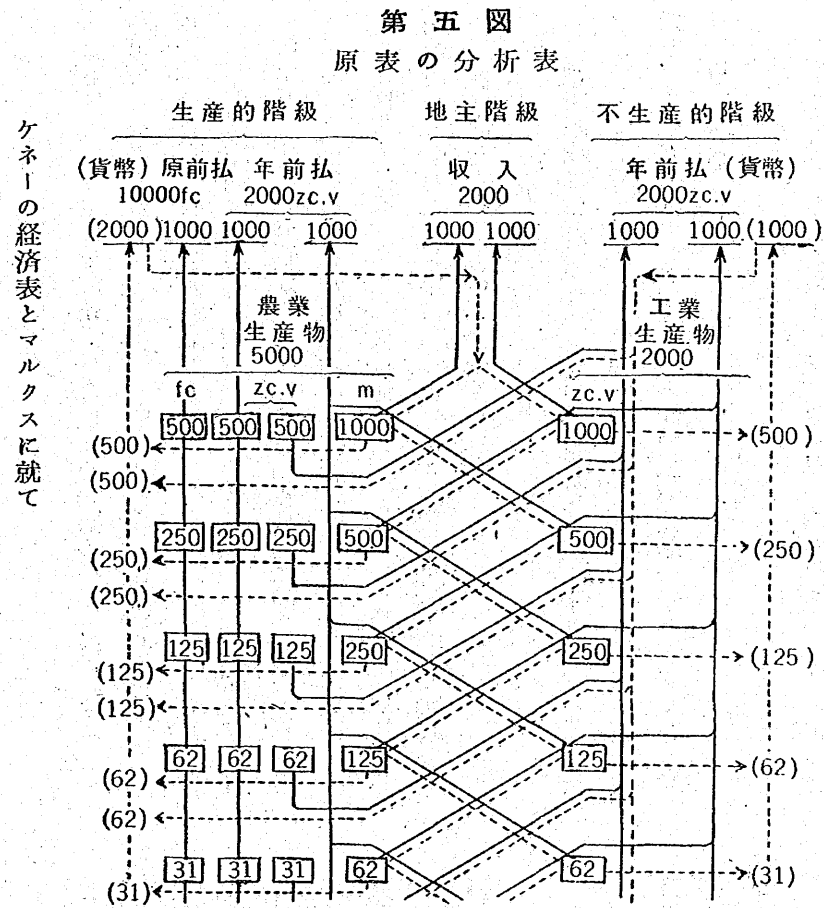
(4) 更に「範式の分析第四表」では越村教授は生産階級が十億リーヴルを支出して購入せる工業製品の内二億五千万リーヴルの機械油、

ケネーの経済表とマルクスに就て

第四図 範式の分析第四表



人造肥料等は農業補助材料即ち流動不変資本として使用され、五億リーヴルの衣料、家具等のごとき消費財は流動可変資本として使用せられ、これら年投資としての七億五千万リーヴルを除く残額の工業製品二億五千万リーヴルのみが、農産物七億五千万リーヴルと共に生産階級の原投資の年々の磨減分十億リーヴルを補填するものとする。従って、原投資の利子としての支出の回収分として再生産せ



ケネーの経済表とマルクスに就て

六三 (九〇三)

の再生産運動を現実として最も良く表現しているものと言ひ得るものとせらるるが、ただ形式から見れば農業者によって購入される工業製品の一部が原投資を補填している結果、範式的形式を破っていることを教授自身認められていた(同書八五頁、九二頁参照)。従ってケネー経済表の範式的疑問——生産階級の年投資から不生産階級へ引かれる点線の問題——を何等解決されていないこととなる。

**第四 越村教授の「原表の分析表」に就て**

越村教授の「範式的分析」の前記の第四表では生産階級の年投資と、原投資の利子と不生産階級の投資とは前頁の表の如く、年々補填されるものとして表示されているのである。

越村教授は原表を解説するに、従来最も人々に親しまれたものであり、且つそれに使用されている数字が範式と対照する最も便利であるからという理由からミラボー侯の『農業哲学』の経済表を採用せられる。

越村教授は範式と原表を比較して、「範式においては生産階級の原投資の利子の運動と不生産階級の年投資の代置運動とが表のうへに表現されてゐるけれども原表ではこの過程の表現が甚だ不充分のため表そのものに一の謎的性質を附与してゐる。」(同書一〇二頁)と考えられ、範式には「不生産階級に属する工業家の最初に投下した一千リールの年投資が農業より原料や食糧を購買するために支出されてゐるのに、原表にてはこの貨幣の運動を示めず線がなから表中に示されず、その金額一千リールが、経済表の右端に、他より隔離して、書き込まれてゐるにすぎない。これが原表の研究者をしてしばしば不可解の声を発せしめる原因の一つなのである。」(同書一一頁)とせられ「この孤立的に表現された不生産階級の年投資の運動を追跡す

(一) 生産階級の年投資と投資の利子に就て

分析	年投資 20 億	投資の利子 10 億	本稿
第一表 77頁	農産物(年投資回収) 1zc→1zc " (年投資回収) 1v→1v	製作品 1zc→1fc	第一図 59頁
第二表 81頁	農産物(年投資回収) 0.5zc } →1zc 製作品 0.5zc } 農産物(年投資回収) 0.5v } →1v 製作品 0.5zc }	農産物(投資利子回収) 1fc→1fc	第二図 60頁
第三表 83頁	農産物(年投資回収) 0.5zc } →1zc 製作品 0.5zc } 農産物(年投資回収) 0.5v } →1v 製作品 0.5zc }	農産物(年投資回収) 0.5zc } →1fc " " 0.5v }	第三図 61頁
第四表 86頁	農産物(年投資回収) 0.75zc } →1zc 製作品 0.25zc } 農産物(年投資回収) 0.5v } →1v 製作品 0.5zc }	農産物(投資利子回収) 0.75fc } →1fc 製作品 0.25zc }	第四図 61頁

(二) 不生産階級の投資に就て

分析	投資 20 億	本稿
第一表 77頁	農産物(投資利子回収) 1fc→1zc " (純収穫) 1m→1v	第一図 59頁
第二表 81頁	農産物(年投資回収) 0.5zc } →1zc " (年投資回収) 0.5v } " (純収穫) 1m→1v	第二図 60頁
第三表 83頁	農産物(投資利子回収) 1fc→1zc " (純収穫) 1m→1v	第三図 61頁
第四表 86頁	農産物(投資利子回収) 0.25fc } →1zc " (年投資回収) 0.25zc } " (年投資回収) 0.5v } " (純収穫) 1m→1v	第四図 61頁

られた農産物二億五千万リールと年投資の不変資本二億五千万リール、可変資本五千万リール、それぞれの回収分としての農産物七億五千万リールとが不生産階級に購入せられるものとする(同書八六頁、本稿第四図)。

斯くして、越村教授はこの「範式的分析第四表」は最も錯雑した形で示めされたが、それは最も事実近くに、従ってケネーの経済表



ることによって原表から範式への転化の問題の一つを解決することが可能となる」(同書一二二頁)として、その「原表の分析表」(同書一二二頁、本稿第五図)にては

(一)不生産階級はその所有する貨幣一千リールを工業品の原料或いは食糧とする農産物購入のために等比級数的に減じつつ生産階級へ支出し、その購入せる農産物が年投資となるものとして表示せられる(同書五七頁、一二二頁参照)。尚、斯く生産階級へ不生産階級より支払われたる貨幣は次年度に地主階級へ地代として納付せらるべく保有せられるものと表示せられる。

(二)地主階級は生産階級より納付せられた貨幣二千リールの所得を支出して生産階級よりその純収穫の農産物一千リールを購入消費し、不生産階級より衣服、家具等の工業製品一千リールを生活のために購入する。

(三)生産階級は地主階級より受け取る農産物の代金一千リールの一半、五百リールを支出して不生産階級より工業製品を購入するが、その一半は衣料、家具等の如く消費手段として農業の労働力即ち流動可変資本 $v$ を更新し、他の一半は化学肥料、機械油等の如き農業の生産手段として流動不変資本 $zc$ を補填するものとする。尚生産階級に保留せられたる貨幣五百リールは次年度に地主階級に支払わらるべき地代の一部となるものとする(同書一二二頁参照)。斯

くして生産階級の年投資五百リールは工業製品をもって補填されるものとするが、原表の如くその年投資の使用によりて純収穫が再生産されることはこの「原表の分析表」にては中央に表示されていないのである。

又越村教授は、原投資の年々の磨滅分は農産物をもって直接補填されるが、この原表の表現様式によれば他にいずれの階級からも購買されない農産物が残ることとなり、ここに一つの難点が横わることとなるが、ケネーはこの部分は農村の自家消費と説明するがこれは誤謬であると断じて居られる(同書一二三頁参照)。

(四)不生産階級は工業製品の代金として地主階級より得た一千リールの貨幣の一半、五百リールを支出して更に生産階級より食糧又は原料とする農産物を購入し、残額五百リールの貨幣は先きに生産階級に支出せる貨幣の回収の一部として保有するものとする(同書一二四頁)。

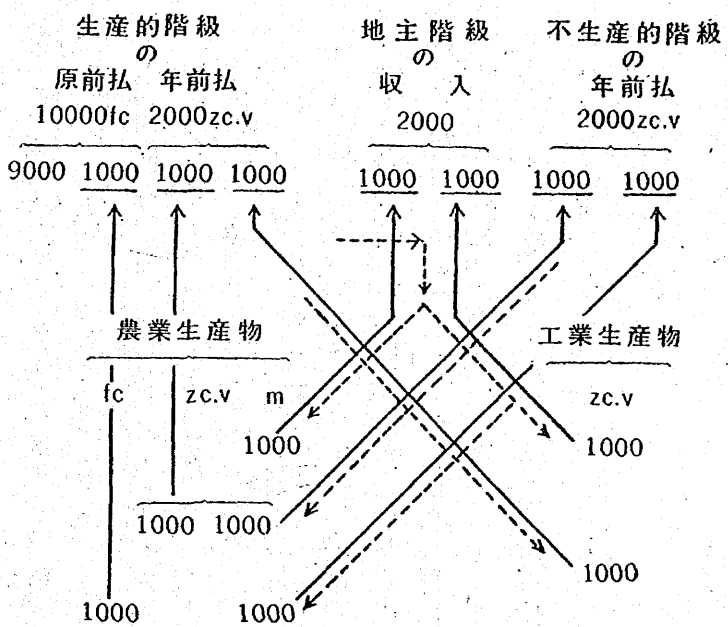
(五)次いで五百リールの農産物の代金を得た生産階級と工業製品の代金として五百リールを得た不生産階級とはその一半、二百五十リールを相互に支出し、その残額二百五十リールは相共に保有するものとする。この五百リール以下の支出過程を総括して越村教授はその「原表の分析表の略表」(同書二二九頁、本稿第六図)を掲げられる。而してそれは前記「範式の分析第二表」(同書八一

三

第五 越村教授の経済表の解説を検討するに

頁、本稿第二図)と同じ形式のものであり、従って「原表より範式への転任の過程」が明らかにされたものとせられたのである。洵に、「原表に於て流通秩序の外に横はるものとして除外されていた農業の原投資の固有の運動と工業の投資の補填運動とが範式において初めてはっきりと表の上に表示された。すなはちこれによって再生産の総過程がより完成された形式で表現されるやうになったのである」(同書一三二頁)とせられたのである。

第六図 原表の分析表の略表



ケネーの経済表とマルクスに就て

第三表では全額農産物にて、第四表ではその四分ノ三は工業製品でその四分ノ一は農産物で年々補填されるとし、原表の分析表では全額農産物でその階級内にて補填されるものとする。然し、マルクスが「反デューリング論」に解説する如く、ケネーは範式にては貨幣としての年投資の一半を支出して購入せる工業製品をもって、原投資の一分の、年々の磨滅分を補填するものとなすものと解す可きものと考えられる。従って越村教授の「範式の分析第一表」(同書七七頁、本稿第一図)が、筆者の範式の解釈に近いものとなるのである。越村教授の生産階級の原投資及びその年々の補填に就ての解釈は原投資中の収穫に先立つ二カ年間の年々の費用に余りにも把われた観がある。原投資は農場創設の費用ではあるが、年々の補填はその諸設備の修復と簡単に考えてケネーの意図に誤りなきものと思われる (Euvres, p. 312: 岩波文庫本五一頁、坂田訳本一三八頁参照)。

(二) 不生産階級の原投資に就てケネーが少しも言及されていないのは「明かに不当であり誤謬である」(同書五六頁)と越村教授はせらるるが、生産階級の原投資に就ても「流通秩序の外に横はる」(Philosophie rurale, p. 26) ものとして経済表に記入していないのであるから不生産階級の原投資を挙げていないのも当然である。然し、その存在することは経済表第二版の『説明』に王国の富を計算するに当り、不生産階級の富として明らかに「製造業の創設のための道具、機械、水車、鍛冶工場又は其の他の慣行等のために行ったこの階級の原投資、二十億リール」(Tableau Economique, p. ix) 邦訳、岩波文庫本二七頁、坂田訳本三四頁)と計上している。而して又その年々の磨滅分の回修に就ては階級自体の製作品で補導され、従って階級内の支出として経済表から除外されると考え得られないことはないのである。

(三) 生産階級の年投資に就てケネーは経済表第二版の『説明』に純収獲たる農産物を、地主・不生産階級に売却せることによりて受け取る貨幣が生産階級の年投資となると説明しているが、越村教授は『経済表の分析』の説明から「剰余生産物の販売によって農業者の手に帰した貨幣はただ地代の支払手段として役立つのみである」(同書七五頁)と解し、それを財貨の形態にて把握、而もそれをケネー自身が解したごとくに生産階級内の労働力となる消費せら

るる農産物たる可変資本 $2v$ と解釈せずして「年投資は種子と労銀を含む」というオンケンといわゆる「合理的な見解」に従うとして「範式的分析第一表」では農業の原料たる播種とその補助材料たる肥料等の流動不変資本 $1z_c$ と消費せられる農産物たる可変資本 $1v$ との合計からなるものと解するのである。

経済表各版の数字の基本となった大規模耕作に使用される馬の犁一挺の取獲を『大百科全書』にケネーが寄稿せる『小作人』論 *Penhiers* や『穀物』論 *Grains* に計算するに、いずれも小麦の播種八ボツも、燕麥の播種四ボツも控除されている。従って経済表の生産階級の年投資を農産物と解しても、ケネーは播種を控除したものと考えられる。

生産階級の年投資を貨幣の形態にて把握する筆者は、その一半は農業に雇傭せられる労働者へ賃銀として生産階級内に支出され、他の一半は工業の製品を購入するために不生産階級に支出され、この年投資の回収として再生産せられる農産物はその一半はその労銀にて購入する農業労働者の生活のために消費せられ、他の一半は借地農自身の一家の生活のために消費せられるものと解したのである(三田学会雑誌第三十八巻第三・四合併号一四—二〇頁、第八号五二—五八頁参照)。従って越村教授が年々再生産される農産物を価値表式で  $20+1v+2z_{b1}$  と表現しているが筆者の解釈によれば  $10+2v+2z_{b1}$  となるものである。

(四) 不生産階級の年投資に就ては越村教授は範式に掲げられるは「十億リールの価値ある原料のみからなる」ものとし、それは「生産期間の始めにおいて農業者から購入されたもの」で「価値形成の点から見れば不変資本 $0$ であり、回転様式から見れば流動資本である $z_c$ とする」(同書五七頁)が、生産階級の年投資を流動不変資本一単位 $1z_c$ と可変資本一単位 $1v$ との合計と解したので、斯く不生産階級の年投資を原料たる流動不変資本に局限することは「論理的矛盾であり、かつ歴史的事実に背馳する」(同書五九頁)から不生産階級の年投資のうちにも生産階級のそれと対等の内容を盛らなければならぬ(同書五九頁参照)と考えられ、範式の解釈に於ても、原表の説明に於ても、不生産階級の年投資を二単位、流動不変資本(原料)価値 $1z_c$ と可変資本(労働力+食料)価値 $1v$ とから成るものと解釈する(同書三九頁、六〇頁)。

「生産期間の始めに於て購入された製作品の原料たる農産物」(同書五七頁)を不生産階級の年投資とするならば、寧ろ範式の表示せらるる処に抛ればそのために支出せらるる貨幣をその年投資と解釈するが至当と考えられる。ケネーの経済表第二版の『説明』にても原表の支出過程に於て、この不生産階級の年投資が貨幣として回収され保有されることを明らかにしているのである(Tableau Economique, p. ii) 邦訳、岩波文庫本二〇頁、坂田訳本二七頁)。

経済表第二版の「説明」と『農業哲学』の略表からして生産階級の年投資を純取獲が地主・不生産階級に売却されて得た貨幣二單

ケネーの経済表とマルクスに就て

位と解説せる筆者は不生産階級の投資も工業の製作品が生産階級に売却されて得た貨幣一単位と解したのである(三田学会雑誌第三十八巻第三・四合併号一—五頁第三図、同巻第八号五三頁第七図、同誌第五十一巻第三号七頁第七図参照)。

(四) 範式の解釈に於ては勿論、原表の説明に於ても越村教授は生産階級のもの、農産物を自家消費し又不生産階級のもものが、その製作した工業製品をみずから使用するというケネーの説明も、その祖述者であり共働者であるミラボー侯の解説も、オンケン及びバウエルの見解も誤謬であると断定せられる(同書一〇六頁、一一二頁、一二〇頁、一二三頁参照)。然しながら経済表に在りては、地主階級のものと同様に、生産・不生産階級のものもいずれも生産階級への支出と不生産階級への支出とを均等に行うことが、年々同額の再生産が行われる静態的均衡の基本条件であり、自国農産物の需要増加が農業への投資の増額となり、農業の繁栄が他のあらゆる技術を榮えさせ国家繁栄を齎らすこととなり、又これに反対の国民の「裝飾の奢侈」の生活は、自国農業の衰退となり、国家を一路衰滅の破綻に導くものであることを反覆注意しているのである。

ウーグ教授もその「完成せられたる原表」に生産・不生産階級の夫々の階級内の支出を表示しているが(Tableau Economique, p. 75)、筆者も生産階級内の農産物の消費を二単位、略式にては二千里ール、範式にては二十億リールとし、それは借地農一家の

消費する一単位と、その雇用する労働者一家の消費する一単位とする。又不生産階級内にも、その階級の製作する工業の製品を使用するも、それは二単位の製作品を地主・生産階級に売却することによりて回収せられ得るものと解したのである。

四

(内)越村教授の「原表の分析表」(同書二二頁、本稿第五圖)にては生産階級側に貨幣二単位、その場合二千リール、不生産階級側

ボードーの解説		第一例	第二例
生産階級	原年投資	20億	50億
	投資利	4億	10億
	再生年支	2億	5億
	年支	6億	15億
不生産階級	製品総額	12億	30億
	地主階級	6億	15億
貨幣	貨幣総額	6億	15億
	貨幣完全循環	6億	15億
貨幣	貨幣総額	5億	12.5億
	貨幣完全循環	3億	7.5億
貨幣	貨幣総額	2億	5億
	貨幣完全循環	3億	7.5億

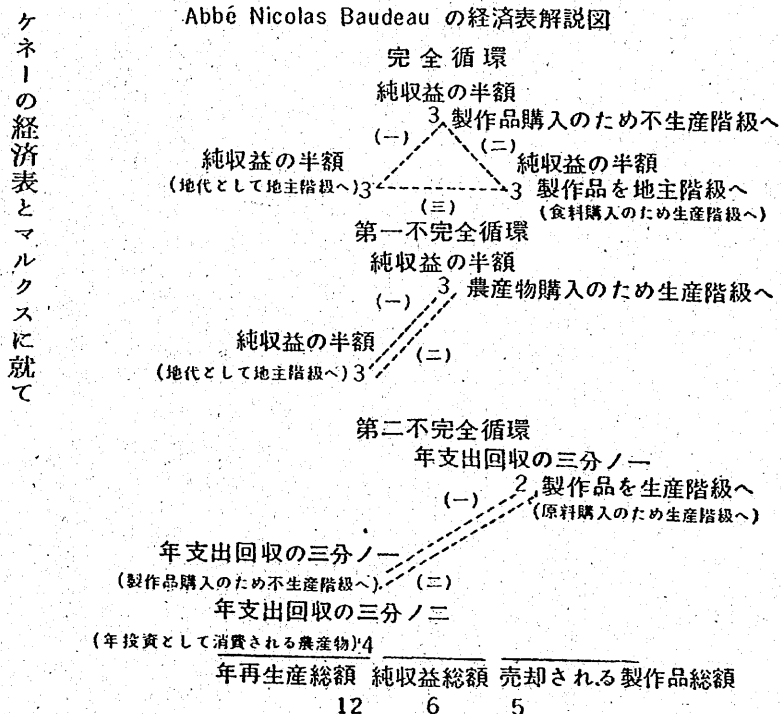
この場合、貨幣額は純収益の133%

に貨幣一単位、一千リールがあり、生産階級の二千リールの貨幣は地主階級へ地代として納付せられ、不生産階級の一千リールの貨幣はその年投資とする農産物購入のため生産階級に支出される

p. 50)。

『経済表の分析』の本文の説明によれば、その流通に要する貨幣総額は三十億リールを要するものとなることは三辺博士や久保田博士の等しく指摘されるところであるが、『経済学説研究』三四七頁、『重農学派経済学』六六―六七頁第二表)、又その要約を表式する時はパウエルの修正図式の如く二十億リールで足るものとなることは又久保田博士の注意せられた処である(『重農学派経済学』六六―

第七図  
ボードーの解説図



ケネーの経済表とマルクスに就て

	支出	支出	
(1) 農産物のまま消費せられる年投資	4	農産物のために 3	食料のために 2.5
(2) 製作品に補填せられる年投資	2	製作品のために 3	原料のために 2.5
(3) 純収益	6	売却される製作品のために 3	地主階級へ 3
再生産総額	12	不生産階級へ 2	

この公式よりして流通回数が「二回転二分ノ一」なれば貨幣量は二単位、二千又は二十億リールで足り、それが「一回転三分ノ二」なれば貨幣量は三単位、三千又は三十億リールを要するものとして「われわれはかかる相対的な関係においてのみ経済表における所要貨幣量の問題を理解すべきであって、それを一定の大きさに固定せしめるところのいかなる考察も経済表を正しく理解する所以でない」と考へる(同書七二頁)と論ぜられるのである。

ものとする。斯くて越村教授の解釈にては、範式に於ては勿論、原表に於ても三単位の貨幣額の流通を前提とする。  
マルクスがケネー経済表の範式を研究するに参照とせるものと考へられるボードーの『経済表の解説』Explication du Tableau Economique, a madame de \*\*\* par L'Auteurs des Ephemérides. に在りては地主階級の所得―第一例にては六億―第二例にては十五億―の外に不生産階級の年投資―第一例にては二億―第二例にては五億―が貨幣であるものとし、この貨幣総額―第一例にては八億第二例にては二十億―の内、地主階級の所得の半額に等しい貨幣額―第一例にては三億―第二例にては七億五千万―は三階級間を完全に循環するも、その残額の貨幣額―第一例にては五億―第二例にては十二億五千万―は二階級間のみを不完全に循環するものであるとする(Physiocrates, t. II, p. 866)。したがってマルクスはケネーは範式の流通に地主階級の所得額二十億リールの他に、不生産階級の投資額として十億リール合計三十億リールの貨幣額を前提とするものと解するが、この不生産階級が投資として十億リールの貨幣を金庫に有するということを説明の便宜から仮定せる貨幣はその流通過程において直ちに不生産階級に逆流して来るからこの額を不生産階級が生産階級へ支払ったのはいままや無駄であったようであると批判している。斯くてマルクス自身は二十億リールの貨幣額を以って範式の流通を説明しているのである(Wood, "The Tableau Economique of François Quesney," 1947.

六七頁第三表)。

『経済循環の基本図式』に於ては越村教授は範式を解説するにその流通する貨幣総額を五十億リールとしたが(同書一六一―一八頁)、後の『ケネー経済表の研究』にては前述の如くそれを三十億リールとして説明するが、尚マルクスが取引される諸商品の価格総額と貨幣の回転速度と所要貨幣額との三者の関係を定式化して「流通過程の或る与へられた期間にとつては、流通手段として機能する貨幣の数量は諸商品の価値総額を同一名称の貨幣片の流通回数で割ったものに等しい」とする。

流通回数として  
一回の流通片の流通回数



然し筆者はケネーがあらゆる機会に於て一国の貨幣量は流通正整に行われ商業が信用上充分の自由とを以て行われるところ——それが経済表の前提とするところ——では地主階級の所得額に等しき額を以て「十二分であり」それより大なる額は毫も「有用なる富でない」と論じている点に於て、又ケネーが第二版の『経済表の説明』に、ミラボー侯が『経済表と其解説』に「一国の富を計算するに、生産階級の富の中に「富裕な農業国民の貨幣または貨幣の保有高はこの国民が商業の仲介によって年々その土地から抽出す純取獲とほぼ同額であるとして二十億リール」(Tableau Economique, p. 22. 邦訳、岩波文庫本二七頁、坂田訳本三四頁)と記載し、又『農業哲学』の略表の附記に「表の中に含まれる富の総額」に地主階級の「所得としての貨幣額」(L'argent du Revenu) 二千リールと記載し、生産階級の投資二千リールに就ては特に貨幣という文字を使用していない点等からして経済表の流通に要する貨幣額は地主階級の所得額に等しき額を以て足るものとして解説すべきものと考えられるので、範式の場合に於てはその貨幣量は二十億リールであつて、その循環の過程に於ては地主階級の所得とも、生産階級の年投資とも亦、生産階級の投資ともなるものと解するのである。

(b) 越村教授の経済表の原表と範式の解釈の特徴の一つは、経済表に点線に示めされたすべての過程を、貨幣の支出過程とせずして、

されているか判明することと思われる。生産階級が商品として所有する純取獲が地主・生産階級の食料として売却せられることによりて、商品資本は貨幣資本→年投資→となり、それと原投資の使用によりて、その年支出の回収分と年投資の百パーセントの純取獲とが年々再生産せられると解せられたのである。又生産階級に於ても、地主・生産階級に売却せられた二単位の製作品の代金の一半は年投資の回収となり、それは再び生産階級に支出されて製作品の原料とする農産物が購入され、又残りの一半は生産階級より生活のために消費される農産物が購入されて年々他の階級に売却せられる二単位の製作品が作り出されるものと解釈したのである。農業及び工業の再生産の運動が地主階級から支払われる貨幣であるとしても、必ずしも、マーカンティリズムの固執した再生産過程の公式  $G-W \dots P \dots W' - G'$  から貨幣は貨幣を生むという誤れる観念にとられていてと早急に断ずることは誤りである。

(c) 越村教授の「原表の分析表」(同書二二頁、本稿第五図)を考察するに、生産階級は地主・生産階級に売却せる農産物の代金二千リールの貨幣の一半、一千リールを生産階級へ製作品の代金として支出するのである。したがってこの原表のジクザクの支出過程を総括すれば地主階級から支払われた全額の貨幣一千リールが生産階級に支払われることとなりて、越村教授の「原表の分析表の略表」(同書二二九頁、本稿第六図)に表示される如く、それ

ケネーの経済表とマルクスに就て

財貨による補填の過程として重点的に考えられ経済表の点線が矢印の実線によって表示されていることにあるのである。

越村教授は「経済表の重心点は貨幣でなくて生産物であり、貨幣の流通は商品資本の流通を媒介する単なる一契機と解せられる。経済表の示さうとする再生産過程は正当にも商品資本の循環公式  $W' - G' - W \dots P \dots W'$  の分析であつた。……したがってわれわれは、原表の貨幣の運動の背後に隠れてゐるところの商品資本の循環系を探究しなければならぬ。」(同書一〇頁)と考えられ、ミラボー侯や、パウエルやオンケンが「原表の外観に囚はれて再生産の全運動を貨幣の循環に局限し、ケネーの見解を、マーカンティリズムの背後に押しやることによって経済表の示さうとする真に偉大なる諸点を研究者の目から遮つてゐる。」(同書一〇八頁)とし、「経済表の表は貨幣の流通を中心として考へようとするオンケンやパウエルは、その説明の出発点において一つの逆立ちを示し、遂にパウエルの修正表に見るやうな決定的誤謬に到達してしまつた。」(同書一三二頁)と論ぜられる。

然し経済表に点線にて表示せられる過程はいずれも貨幣の運動であつて、その結果に於て財貨の移動が行われるのであつて貨幣の循環の背後に財貨の移動が隠されてゐると解すべきである。越村教授の言われる商品資本の循環公式は筆者が、原表と範式の解説図(三田学会雑誌第三十八巻第三・四合併号一一五頁第三図、同誌第三十八巻第八号五三頁第七図)に附記した処により、経済表の何処に隠

によりて購入せられる製作品が年投資の一半、一千リールを補填することであつて年投資の支出を意味することとはならないのである。

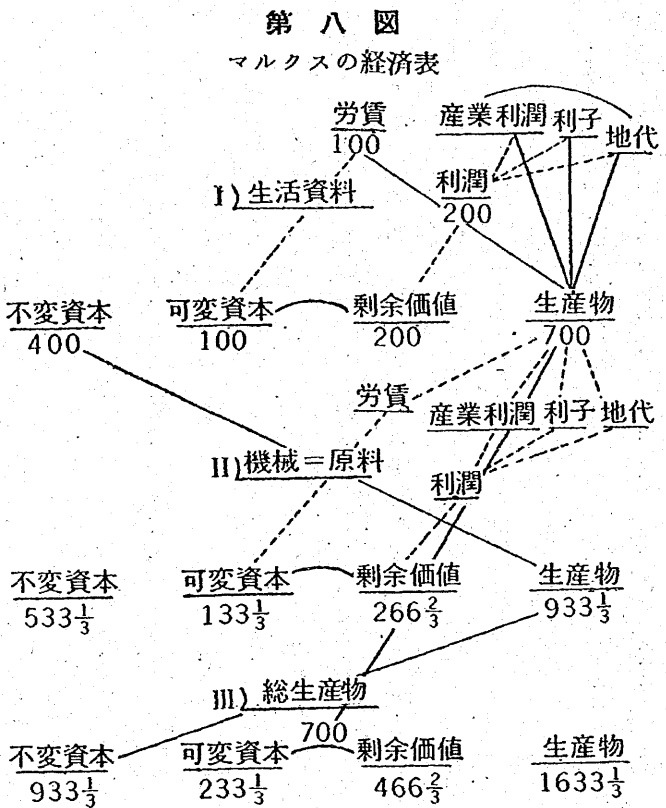
越村教授の解釈では生産階級の年投資二千リールをいずれも財貨とするが故に、その一半が生産階級に支出されることとはなり得ないのである。

洵に、斯く越村教授の経済表の解説の如く原表や範式の点線を貨幣の支出過程とせず、財貨の補填運動と解することが無理であり、而も又その代価として支払われる貨幣の支出が点線で示めされているとしてもその循環の径路は不明確である。更に生産階級側に貨幣二千リール、生産階級に貨幣一千リール合計貨幣額三単位三千リール、範式では三十億リールの存在を前提とすることは前述の如く(本稿七〇頁参照)、その貨幣額に就てのケネーの処論と一致せず筆者の賛成し得ないところである。

筆者はケネーが経済表第二版の『説明』に又ミラボー侯が『農業哲学』の略表の中に、生産階級に於て地主・生産階級に売却せられた純取獲たる農産物の代金即ち貨幣が明らかにその年投資となることを明らかにしていることから『経済表の分析』に生産階級の受け取る農産物の代金がその年投資となると説明することがないが、それを年投資の位置に引き上げて、その一半が生産階級に支出されるものとして範式の解説を行ったのである(三田学会雑誌第三十八巻第八号五三頁第七図、第五十一巻第三号第七図参照)。

五

第六 最後に越村教授は「経済学説史上の迷途と考えられるケネーの経済表よりマルクスの再生産の表式に通ずる発展過程の糸の模索を試みられるが(同書緒言三頁)、マルクスが一八六三年の七月

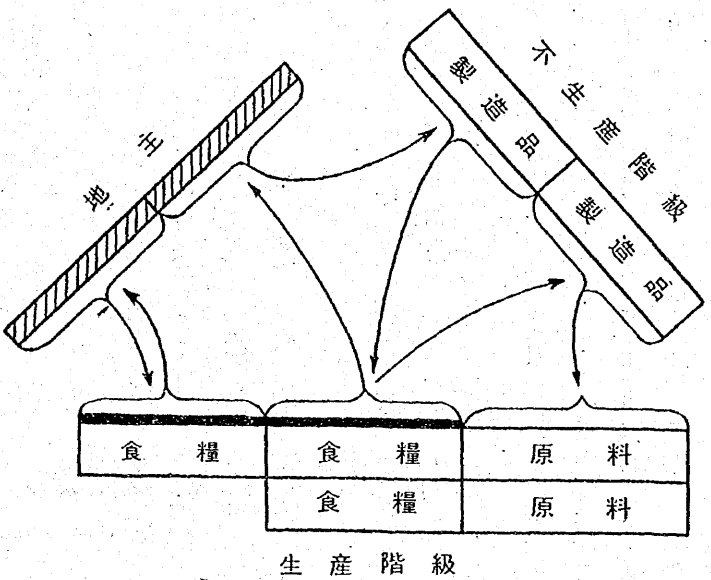


六日附のエンゲルス宛の書簡の中に同封された、ケネーの経済表に置き換えた彼自身の経済表 (Marx/Engels "Gesamttausgabe Dritte Abteilung Brand" 3. SS. 150-151: "The Correspondence

of Marx and Engels" pp. 154-155: 邦訳、山田盛太郎教授著改造社版『経済学全集』第十一卷二六九頁、『再生産過程表式分析序論』一五頁、越村教授著『図解資本論』第二卷下三四三頁)はそれが第一に単純再生産を表現している点において、第二に線で結びつけた一個の表である点においてケネーの経済表から脱化した痕跡を示めしているが、マルクスは拡張再生産の問題の解決の進行に従いかかる「表」での表現形式は極端となったので『資本論』では一八六八年四月二十二日附のエンゲルス宛の書信で初めて提案された  $400C+100V$  のような表現から完成されたより簡潔な再生産の表式  $Q_1+V_1+M_1$  によって置き換えられたのである。従って越村教授はケネーの経済表とマルクスの表式  $Q_1+V_1+M_1$  と比較して「経済表における農業の生産物と工業生産物の範疇がマルクスによって生産手段と消費手段との範疇に転化され、それらを生産する諸産業がそれぞれ独立の部門として対立せしめられたとき、社会的資本の再生産運動に伴う一般的特殊諸条件の把握が、より包括的に、より直接的に、より簡潔に、しかも、より正確になった」ということで、「ケネーの経済表はマルクスの経済表、あるひはさらに再生産の表式によって置き換えられ、その学説のうちに発展的解消を遂げたのである」(同書一五五-一六頁)と結論されたのである。

又、都留重人教授はその『国民所得と再生産』一一九五〇年一の第三篇再生産の第七章「再生産表式について」一これは一九四二年刊行の Paul M. Sweezy の "The Theory of Capitalist De-

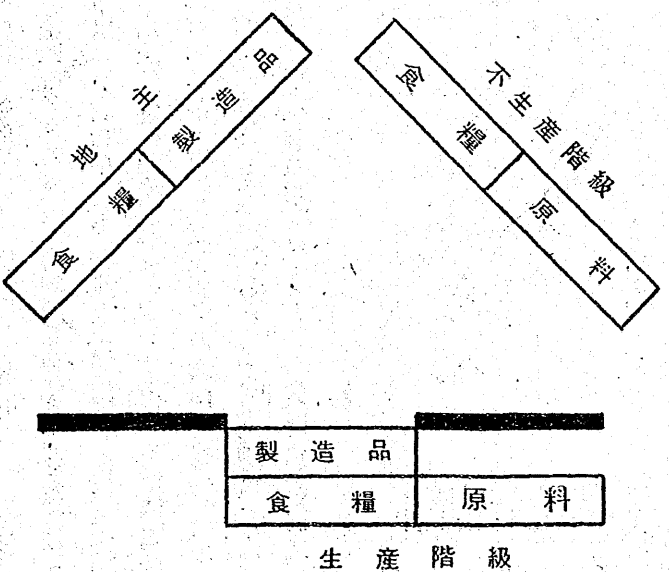
第九図



Development" の附録 A として載録された "On Reproduction Schemes" の補筆せられたものであるが、シュムペーター J.A. Schumpeter はケネーの経済表に就て「最少の苦勞をもってその考え方の本質に迫る最善の方法はスウィーシーの『資本主義発展の理論』の附録の都留重人の手になる秀抜な解明を見ることである」(邦訳『経済分析の歴史』第二卷四九八-五〇〇頁)とせられたのである。その第二節「ケネーの表」の中に、経済表を交換が行われる

ケネーの経済表とマルクスに就て

第十図

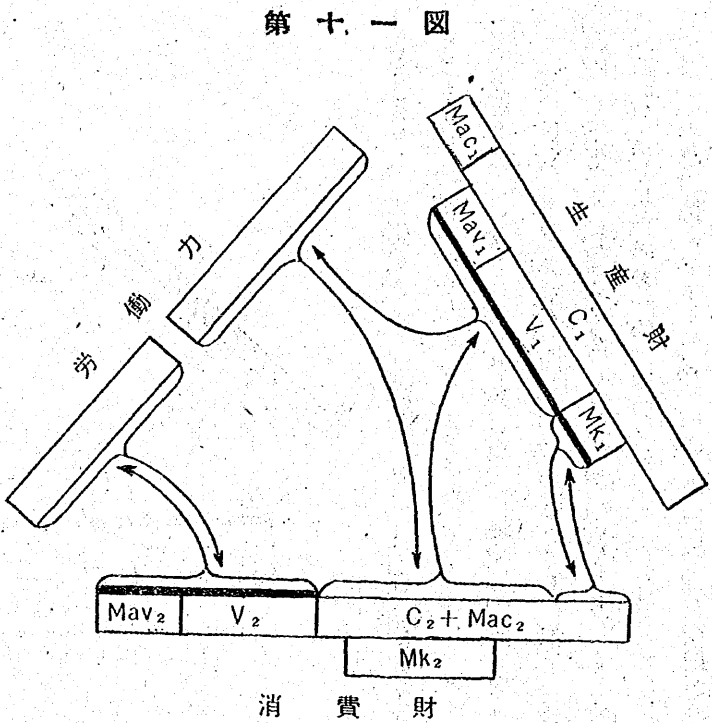


以前の状態 (ibid., p. 366. Diagram 1: 同書二一三頁第六図、本稿第九図) とすべの販売と購入とが完了せる後の状態 (ibid., p. 367. Diagram 2: 同書二一四頁第七図、本稿第十図) とによりて説明しているが、貨幣は「太い実線」にてその所在を明らかにしている。これと比較してマルクスの表式の特徴を一層明らかにするために、拡張再生産の場合を取り扱い、その方程式

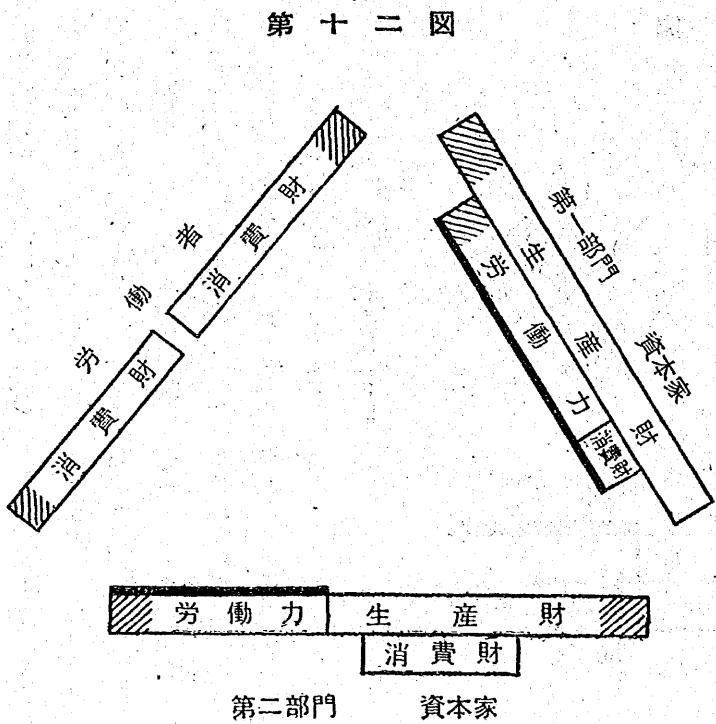
$$Q_1 + V_1 + M_{ac1} + M_{oc1} = W_1$$

$$Q_2 + V_2 + M_{ac2} + M_{oc2} = W_2$$

現代に於てレオンティエフ教授 Wasily W. Leontief がその偉大なる業績『アメリカ経済の構造』The Structure of American Economy, 1919-1939 の投入・産出の分析、産業関連の分析は、ケネーの経済表に発想し、レオン・ワルラスの経済理論にその分析の基礎を据えたもので久保田明光博士は「或意味ではケネーの播いたこの種子の現代的結実である」といっても過言でないであろう」(早稲田政治経済学雑誌第一四六―七号合併掲載論稿「ケネー経済



にて表わし、前と同様に流通の開始前の状態 (ibid., p. 368, Diagram 3: 同書二一五頁第八図、本稿第十一図) と、その流通後の状態 (ibid., p. 369, Diagram 4: 同書二一六頁第九図、本稿第十二図) として表示しているが、経済表に於ける地主・生産・生産三階級の三つの「コーナー」はマルクスの場合は生産財、消費財、労働力、或いは第一部門資本家、第二部門資本家及び労働者の三方面に変更されて比較されているのである。



表の近代経済理論への若干の貢献について」(四頁)とせられたのである。

又山田雄三教授は「国民所得の計画理論」(一九四九年)に更にフウドゥール J.-R. Boudeville は Revue d'Economie Politique 誌上(一九五四年五・六月号)に掲載された「フィジオクラトと経済循環」Les physico-clastes et le circuit économique に現代の国民経済会計の分析方法から経済表を検討しているのである。

斯く、ケネーの経済表は公刊せられてより二百年、それ自体に多くの謎を秘めたままに、各時代、時代の優れた経済学者の夫々の立場に於ける思索の上に、いずれも貴重な示唆を与えつつ経済学の古典の一つとして永遠にうけつがれて行くものと考えられる。

ケネー生誕二百五十年に当る昭和十九年(一九四四年)に、筆者は、「経済表」の基本的諸表が前提としているフランスの農業再建の状態を検討して、その「数字」の論拠を解明し、又原表から略表をへて範式(略表)に到達せるその「点線にて示めされる機構」の推移を探索したのである。

『百科全書』の「穀物」論に計算される農業再建の状態が、恒久的に維持せらるべき秩序として「経済表」が創案されて、その初版が二百年前の一七五八年の十二月に、ヴェルサイユの宮廷内の印刷所にて印刷されたのである。斯く考えることによって、はじめて「経

ケネーの経済表とマルクスに就て

済表」の生成の意味が理解されるであろう(拙稿「経済表の生成発展」『三田学会雑誌』第三八巻第二号、「経済表解註」同誌第三八巻第三・四合併号、「経済表の省略化と其範式」同誌第三八巻第八号参照)。

戦後「経済表」の解説書として、昭和二十二年(一九四七年)に、越村信三郎教授の『ケネー経済表研究』(現代経済学叢書)一九五〇年に、ウーグ博士の『フランソワ・ケネーの経済表』(The Tableau Economique of Francois Quesnay, — An Essay in the Explanation of its Mechanism and a Critical Review of the Interpretations of Marx, Bilimovic and Oncken. 昭和三十一年(一九五六年)に、坂田太郎教授の『ケネー経済表』の「訳者解説」が刊行せられたので、筆者はこれらの解釈と自己の解釈との比較を試みたのである(拙稿「安定均衡の経済表に就て」『三田学会雑誌』第五〇巻第二号、「不均衡の経済表に就て」同誌第五一巻第八号、「ケネー経済表(原表)の疑義に就て」同誌第五〇巻第六号、「ケネー経済表範式の疑義に就て」同誌第五一巻第三号、「ケネーの経済表とマルクスに就て」同誌第五一巻第十号参照)。

然し、いずれにしても、生誕二百年を記念して一八九六年八月に生地メレ Mere の広場に建てられた記念碑のケネーの胸像に向って、その除幕式にパッシイ Frederie Passy が訴えた如く、「経済表」を解く鍵は、公刊後二百年の今日まで、未だ何人によっても与えられていないのである。

七五 (九一五)